

「最も重たい現実 犠牲の上にある決断の人生」

マルコ14:32~50

■ ゲッセマネの園 大きな決断がなされた場所

日本の関ヶ原では、戦いのため多くの人が犠牲になりました。メギドの要塞では歴史的に長い間にわたり多くの人たちが犠牲になり、人間の様々な価値観による戦いが起こりました。両者とも最も大きな決断がなされた有名な場所です。しかし、小さくあまり有名ではないゲッセマネという場所は、実は十字架よりも大きな大きな決断であったのです。

■ ゲッセマネ—ベテル(神の家)

ゲッセマネとはヤコブの創世記の時代にさかのぼります。ヤコブとエサウは双子の兄弟で、兄のエサウは長子の権利を軽んじ、弟のヤコブにそれを取られてしまいました。ヤコブはその葛藤の中、ひとつの場所に出かけ、石の枕で寝ていると、御使いがはしごを行き来している夢を見たのです。イエスキリストがゲッセマネで祈った理由とは何でしょうか。ヤコブは兄と憎しみあい、葛藤する痛みを何故通らなければならなかったのか、それはアダムとイヴの出来事により神様との愛の関係が終わり、裏切りの関係になったことに通じます。夫婦である恵みを軽んじ、食べてはならない木の実を食べてしまった行為によりすべてが終わりました。その場所で、ヤコブは御使いの夢を見て、ヤコブを、子孫を祝福するという神様の語りかけに出逢います。ヤコブはこの場所で神様のために生き、十分の一を捧げオリーブオイルを注ぎ、ここをベテルとしました。神によって選ばれた神の家という意味のベテルは、ゲッセマネという言葉はそれと同じ意味だと言われます。

■ ゲッセマネの祈り—決断

イエスキリストは天を押し曲げて家畜小屋に生まれました。そしてこの場所で、『苦しみ深く恐れもだえ始められた。わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで目をさましていなさい』と書かれています。『深く恐れもだえる』とは、この場所で『本当に受け止めることができないほど重く、驚くべき事実』という意味を表します。彼は十字架にかかるのが怖かったわけではなく、今までとは違う、自分の理解とは違うことが告げられたからでした。彼は人として生まれ、自分を無にし、仕える姿となることを決心してきました。そして父なる神がいつも共におられることは揺るぎない事でした。しかし、神様はこの場所でイエスに言われたのです。私はあなたと関係を絶つ。イエスキリストは、過ぎ越しの神の恵みを得るため、エルサレムの城壁の中に入りました。ゲッセマネの園での祈りは、アダムとイヴから引き継がれた人間の様々な憎しみと呪いと恨みとそのすべての葛藤がそこにありました。それはまさしく、パリサイ人たちがイエスを捕らえようとして右往左往して葛藤する様子です。そして、人の最も汚れた最初の家畜小屋の環境に戻り、絞り出す祈りでした。それは、燭台の灯をとすため、オリーブの実を砕き、押しつぶし、苦しみ、搾り出された一滴の油のように、イエスキリストがこの場所で神様に絞り出す祈りであり、彼自身が砕かれてつぶされなければならなかったのです。

■ 神の怒りの杯

イエスキリストは、神様と自分との関係を絶たれること、神と人との関係が絶たれることがどんなことかを知っていました。『この杯をわたしから取りのけてください』と祈ったのは、それは彼が神の怒りが入った杯で、それは後に神様から捨てられた人々が完全に捨て去られる姿だったからです。彼は最も愛する神と人(自分)との関係を、この場所で絶たれると宣言され、その重荷のゆえに押しつぶされ、血のにじむような汗を流し苦しみました。彼がそれほど苦しんだ理由は、神様と人との関係が絶たれる、アダムとイヴの出来事が、どれほどの痛みで、葛藤であるかを、神様が私たちの変わりにより受け取る痛みだったからなのです。今私たちが大きく受け止めずにすむのは、イエスがそれを逆に背負ってくれたからです。イエスの弟子たちも祈らず何度も眠ってしまいましたが、イエスは『心は燃えていても、肉体は弱いのです』と彼らを思いやりました。非常な苦しみの中でさえも、イエスは真剣に神様に祈りながら、彼らの痛みを背負う準備をしたのです。このあと、向かう十字架はイエスにとって、蛇を踏み砕いたようににはここですべてを断ち切り、すべての決心だったのです。その痛みの中を進む時も、弟子たちが裏切り逃げ去ったことも彼は神の前に強く立ち続けました。彼のその決断はあまりにも大きなものだったのです。本当に愛する人から絶たれるという痛みは、

親がわが子を失うという痛みと似ていると言われますが、どんなものかを私たちには理解することができません。イエスキリストにとっては愛する人と関係を絶たれるということ、すべての関係を絶たれるという痛みは、私たちがこの人生のすべての大切なものを失う痛みと同じ痛みだったのです。だから彼は、「苦しみのあまり死ぬほどだ」と言ったのです。私たちがもう一度考えるべきなのは、私たちの人生のために命をかけて戦った人がいて、その人は私たちにすべてを砕き、内側からすべてを絞り出し、私たちの持っているすべての痛みを取り去るために彼が背負う決断をした日だということです。私たちの人生にとって絞り出さなければならない、でも取り去られたくないと思っているのは何でしょうか。私たちは、本当は神様との関係を引き裂かれるのを本当は一番恐れていたのです。しかし、自らの心の中にある私たちの人生の結果を左右するような立場、関係、願いを取り去られることを恐れます。「私は決してつまずきません」と宣言してもイエスが捕らえられると逃げ去ってしまったペテロのように、人は最も大切な存在を尊ぶよりも、その時目の前にあるものを選んでしまう弱さがあります。でもイエスキリストは目の前にあるすべての痛みの故に、悲しみに崩れてすべてを捨てることなく、祈りの末に立ち上がり、私たちの道が暗闇にならないように、心の底に光をとすために、彼は絞り出してゲッセマネの油を私たちの命の変わりにしたのです。私たちは自分の中に、神様との関係をも捨ててしまうような誘惑がきます。イエスキリストが誘惑に陥らないようにしなさいと弟子に言われた言葉は、今後私たちの人生を左右するようなテストが来るとい言葉だったのです。その誘惑に陥ったその時も、倒れても躓いても倒れ果ててしまわないように、とりなしの祈りと共に、イエスキリストは私たちの代わりにその罪の道に立ち上がり、神との関係を絶ち切り、すべてを背負って下さいました。

■ 最も重たい現実—犠牲の上にある決断の人生

この1週間十字架を思い、そして神様とそれ以外のものをおかけの天秤を祈り願ひ、それをどう選ぶのか決断します。最も重たい現実、私たちがその犠牲の上に決断の人生を生きるように言われています。私たちの人生で神様が見捨てられることはありません。彼が見捨てられる痛みのすべてを背負って神の怒りの杯を一人で飲んだからです。永遠の滅び、永遠の死。それは私たちに到底理解できない痛みでした。そんな私たちのため、その痛みを知っている人自らが、その痛みをとり、選び、そして神から断絶されるその痛みを背負われました。死に至る病を背負った人間のその死を取り去るために彼は十字架の道に進んでいきました。イエスが「主よ、どうかこの杯を取り去ってください、しかし私の願うようにはなく、あなたの願うようになさってください」と祈ったように、愛する者のために自らが最も尊ぶものを犠牲にしてでもその人が尊ぶものを回復させたいと願う人生、それが愛難週に生きる私たちの生き方です。

祈り

私たちの心のうちからその重石を取り去り、そして絞り出すそのすべての犠牲をはらって下さったあなたに感謝し、どうか私たちの人生をあなたに返せることができますように。十字架が一人ひとりのところに届き、あなたが歩まれたその道を顧みることができるよう。「私がその痛みを背負うから。今日あなたは私とともにパラダイスにいる」と主が言われたように、私たちの人生が愛の人生へと変えられたことを、神様に願い、受け取ることができますように。

今、あなたの前に私は決断します。まだ心の内に自らの弱さがあり自分を得ようとする心があります。主よ、赦してください。あなたがゲッセマネで決断されたように私も目の前にくる誘惑を踏みくぐり、あなたが回復して下さった父なる神との関係を願います。

あなたが絞り出してくださったその灯の油で、光を与えて下さったあなたの愛、その犠牲の上にもわたしたちは決断をします。あなたとともに歩みます。

(要約者:河島 弘子)

(2023年4月2日)